Institute of Human Culture Studies Otsuma Women's University

Newsletter

発行●大妻女子大学人間生活文化研究所

No.12
2019

CONTENTS

野性の呼び声…… 1
新着ニュース …… 1
科学研究費助成事業2019年度「科研費」採択課題 …… 2
2019年度科研費新規採択者のご紹介 …… 3
科研費新規採択者課題概要…… 3
大妻女子大学　戦略的個人研究費…… 10
人間生活文化研究所　研究費助成事業…… 11
競争的外部資金の獲得支援事業「科研塾」の開催…… 13
電子書籍「Otsuma eBook」…… 14
科研費 PDCA スケジュール…… 16
協賛企業…… 16

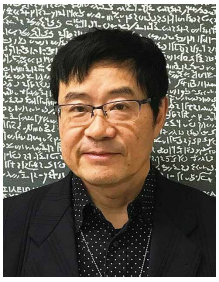
野性の呼び声

昨今の先史考古学の成果は目覚ましいものがあり、初期人類の生活と文化が次々と明らかになっています。例えば、最近ネットには、次の記事が掲載されました。「ポーランドで発見されたネアンデルタール人の指の骨は、巨大な鳥の餌にされた子供の骨だったことが明らかになった。指の骨の表面は、多数の穴で覆われていた。これは、大きな鳥の消化器官を通過した跡である。」（2018/10/11）「フランスで発見されたネアンデルタール人の遺骨に、共食いの痕跡が発見された。その証拠は、石器などによる意図的な骨の分断、咀嚼された痕跡などである。」（2019/03/30）

猛禽類に捕食される危険、過度の栄養不足という過酷な環境に直面し、初期人類は、自分たちの無力さを実感したに相違ありません。ネットには、次の記事もあります。「20万年前のデニソワ人が、首飾り・腕輪・ビーズなどの装身具を制作していた可能性がある。」（2019/01/31）

この程、人間生活文化研究所は、＜東南アジア狩猟採集民の生活と子供の発育発達＞を開催しました。会場には、ミャンマーのカヤン人が身につけた首輪が陳列されていましたが、驚異的な大きさと重さでした。大石芳野の写真集『パプア人　いま旧石器時代に生きる』には、家族の中で一人死者が出るたびに、自分の指を切り落とした女性たちの話が出てきます。彼女たちは、切り落とした指を乾燥させて紐に通し、自分の首からぶら下げました。

初期人類の装身具や、辺境地の身体加工などの風習は、＜呪術＞と密接な関係があると思われます。＜呪術＞は、超自然的な存在に訴えることにより、願望の実現を目指した行為です。最近、新元号が制定されましたが、『字通』は、「令」について「礼冠をつけて、跪いて神意を聞く人の形」と記しています。これは明らかに、人間の呪術的行為を表しています。人間の生活と文化を究明する際、＜呪術＞は必須の概念であると思われます。その際、過去と辺境から学ぶことは、多々あると思われます。



大妻女子大学
文学部長
村上　丘

[新着ニュース]

科研費の新規ご採択おめでとうございます

2019年度、本学では、新規採択課題15件を含む、全47件が採択されました!!（2019年7月4日時点）

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金／科学研究費補助金）は、人文学、社会科学から自然科学まで全ての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる「学術研究」（研究者の自由な発想に基づく研究）を格段に発展させることを目的とする「競争的研究資金」であり、ピアレビューによる審査を経て、独創的・先駆的な研究に対する助成を行うものです。（日本学術振興会ホームページより）

日本学術振興会 科学研究費助成事業 2019年度「科研費」採択課題

■ 新　規（15 件）

研究種目	研究代表者	所　属	研究課題	研究期間（年度）
基盤研究（B）	大澤　清二	人間生活文化研究所	社会・自然環境と子どもの身体技術能力（生活技術を含む）の発達過程の相互作用	2019-2021
基盤研究（B）	宮﨑　美智子	社会情報学部	ゲーミフィケーション・機械学習を利用した幼児の自己身体認識評価課題の開発と評価	2019-2022
基盤研究（B）	柴山　真琴	家政学部	二言語を同時習得する日系国際児の日本語作文力の発達過程の解明	2019-2023
基盤研究（C）	高橋　ゆう子	家政学部	対話的アプローチを用いた発達障がい児に対するチーム支援プログラムに関する研究	2019-2021
基盤研究（C）	山倉　健嗣	社会情報学部	企業―ステイクホルダー関係における媒介者の機能・パワー・正当性に関する研究	2019-2021
基盤研究（C）	小川　浩	人間関係学部	ジョブコーチの知識及びスキルの明確化と職能評価基準の開発に関する研究	2019-2021
基盤研究（C）	渡邉　顕彦	比較文化学部	日本関係の近世ラテン語文学―成立の文脈と未校訂写本の研究―	2019-2021
基盤研究（C）	木戸　雄一	文学部	日本近現代文学におけるメロドラマ的想像力の展開に関する多角的研究	2019-2021
挑戦的研究（萌芽）	平井　郁子	キャリア教育センター	車両用座席シートの審美的快適性の研究―白色化防止座席シート開発への提言―	2019-2021
若手研究	吉井　健	家政学部	ショールーマーとリバース・ショールーマーのアパレル商品情報の探索と購買行動の研究	2019-2021
若手研究	石川　千暁	文学部	公民権運動期以降のアフリカ系アメリカ文学における身体的経験としての痛みと親密性	2019-2021
若手研究	竹部　成崇	文学部	不況の知覚が内集団の範囲を狭めて曖昧成員への攻撃を促進するプロセスの解明	2019-2021
若手研究	牧野　智和	人間関係学部	学校建築の社会学的研究	2019-2022
若手研究	森　功次	国際センター	理想的観賞者説の改訂・展開による、複合文化的な美的経験論の構築	2019-2022
特別研究員奨励費	上村　陽子	文学部 （日本学術振興会特別研究員）	現代中国における日本のグローバル経済戦略と広告メディアのジェンダー・ポリティクス	2019-2021

■ 継　続（32 件）

研究種目	研究代表者	所　属	研究課題	研究期間（年度）
基盤研究（B）	水谷　千代美	家政学部	臭いの快不快評価定量化の試みと在宅介護不快臭対策への応用	2017-2020
基盤研究（B）	池田　緑	社会情報学部	経験的概念としての「ポジショナリティ」の実証的研究	2018-2020
基盤研究（B）	下田　敦子	人間生活文化研究所	ミャンマー 135 民族の民族服製作技術の残存調査と技術学習過程の最適化方法論の開発	2018-2021
基盤研究（C）	内藤　千珠子	文学部	日本語文学における検閲とジェンダー	2015-2019
基盤研究（C）	落合　友四郎	社会情報学部	金融市場の高頻度データ解析とリスク管理への応用	2015-2019
基盤研究（C）	青江　誠一郎	家政学部	穀類の摂取による高血圧症の予防効果と腸内代謝を介したメカニズムの研究	2016-2019
基盤研究（C）	須藤　良子	家政学部	エジプト・コプトの染織品とインド更紗の制作年代および制作地の特定に関する研究	2016-2019
基盤研究（C）	天野　みどり	文学部	現代日本語の自他に関する構文的研究	2016-2019
基盤研究（C）	市村　哲	社会情報学部	家庭における日々の家事／活動をゲーミフィケーション化する研究	2016-2019
基盤研究（C）	清原　康介	家政学部	学校管理下で起こる心臓突然死の予防に向けた市民 AED の普及と効果に関する研究	2017-2019
基盤研究（C）	坂田　哲人	家政学部	保護者の成長志向性と組織要因との関連における保育者の成長モデルの構築に関する研究	2017-2019
基盤研究（C）	大橋　寿美子	社会情報学部	高齢期に対応した多世代共生型集住（コレクティブハウス）の有用性に関する研究	2017-2019
基盤研究（C）	松本　暢子	社会情報学部	住居系市街地の住宅更新における賃貸併用住宅の有用性に関する研究	2017-2019
基盤研究（C）	下井倉 ともみ	社会情報学部	理科の指導力を育てる教員養成プログラムの開発	2017-2019
基盤研究（C）	大出　春江	人間関係学部	日本の出産文化の歴史社会学的研究―リプロダクティブヘルスと助産所の機能を中心に	2017-2019
基盤研究（C）	福島　哲夫	人間関係学部	スーパーヴァイザー養成のためのメタ・スーパーヴィジョンに関する研究	2017-2019
基盤研究（C）	野辺　陽子	人間関係学部	社会的養護の自治体間格差の実態と要因に関する社会学的研究―量的・質的比較分析	2017-2019
基盤研究（C）	石川　照子	比較文化学部	ジェンダーからみる近代日中女性関係史の総合的研究――月曜クラブと一土会を中心に	2017-2019
基盤研究（C）	高田　馨里	比較文化学部	第二次世界大戦期、空爆標的地図にみる米英連合国の空爆戦略の転換	2017-2019
基盤研究（C）	松村　茂樹	文学部	近代ボストン美術館における日中米文化交流	2017-2019
基盤研究（C）	榎本　恵子	文学部	17・18 世紀フランスにおける文献資料に見るモリエールと古典ラテン喜劇作家の受容	2017-2019
基盤研究（C）	伊藤　みちる	国際センター	旧英領カリブの多文化共生社会に関する実証的研究：白人性のオーラルヒストリー分析	2017-2019
基盤研究（C）	高木　元	文学部	十九世紀の絵入本における画文一体構成に着目した書物（メディア）史研究	2017-2020
基盤研究（C）	小林　実夏	家政学部	育児期の女性の精神的社会的要因や地域・家族の支援と子どもの食環境や発達との関連	2017-2021
基盤研究（C）	加藤　悦雄	家政学部	子どもの権利の視点に立つNPOの支援構造と倫理的基盤形成のメカニズムに関する研究	2018-2020
基盤研究（C）	荒川　潔	社会情報学部	電気自動車を接続したスマートグリッドの構築に関する制度設計の経済学的研究	2018-2020
基盤研究（C）	中尾　桂子	短大国文科	自律的な積み上げ学習につながる授業内・外学習時のメタ認識出現条件	2018-2020
基盤研究（C）	牟田　博光	人間生活文化研究所	ミャンマー連邦共和国における基礎教育学校の適正規模・適正配置に関する研究	2018-2020
基盤研究（C）	本郷　健	社会情報学部	コンピュータプログラミング学習の神経基盤に関わる基礎研究	2018-2021
基盤研究（C）	上杉　宰世	家政学部	学童期小児における運動器発達と食事・生活状況との関連	2018-2022
挑戦的研究（萌芽）	大平　栄子	短大英文科	英語テクストから見直す近代日本仏教像	2018-2020
若手研究（B）	山本　真知子	人間関係学部	里親養育における里親と実子の意識とその支援のあり方	2016-2020

2019年度科研費新規採択者のご紹介

新規で採択された方は以下のとおりです。おめでとうございます！

科研費 KAKENHI

基盤研究（B）	大澤　清二	副学長、人間生活文化研究所長 ほか
	柴山　真琴	家政学部教授
	宮﨑　美智子	社会情報学部講師
基盤研究（C）	小川　浩	共生社会文化研究所長、人間関係学部教授
	木戸　雄一	文学部教授
	高橋　ゆう子	児童臨床研究センター所長、家政学部教授
	山倉　健嗣	社会情報学部学部長、教授
	渡邉　顕彦	比較文化学部准教授
挑戦的研究（萌芽）	平井　郁子	キャリア教育センター教授
若手研究	牧野　智和	人間関係学部准教授
	吉井　健	家政学部准教授
	石川　千暁	文学部講師
	竹部　成崇	文学部講師
	森　功次	国際センター講師
特別研究員奨励費	上村　陽子	文学部（日本学術振興会特別研究員）

下段より新規採択課題の内、今号では13件の研究課題についてご紹介します。

研究課題　基盤研究（B）　2019-2021

社会・自然環境と子どもの身体技術能力（生活技術を含む）の発達過程の相互作用

〈研究代表者〉大澤　清二　副学長、人間生活文化研究所長

この研究は未開から文明というスコープで人の身体技術の獲得過程に関する発達理論の構築を目指している。研究成果が身体発達に関する諸科学や教育科学の基礎となれば幸いである。今回の科研費申請課題の核心をなす学術的「問い」は以下のようである。

①人の身体技術能力の発達過程に関する知見は19～20世紀に、欧米を中心として形成されてきたもので、その理論は北半球の産業化された現代社会に生きる人に限定されたものである。故に19世紀以前の人たちや、後発的な「南の地域」の人たちの身体技術能力の発達まで拡張したより一般性のある理論が待たれている。

②人が現在に至るまで様々な社会・自然環境下でどのように身体技術を獲得し、発達させてきたのか、という根源的な知識は長い間、不問に付されたままである。

かつて私たちの先祖が行っていた狩猟採集時代の生活は身体能力（人力）のみに依存していた。やがて社会の発展・文明化に伴って人力のもつ比重が徐々に減じ、それに伴って身体技術能力は徐々に低下し、また子どもの身体発達は制限されてきた。

③現代社会は極度に身体の不使用が進行しているために、意図的に身体を使用することや人工的に様式化された運動やスポーツが健康の維持のために唱導されるという人類史上きわめて奇妙な時代である。

④将来的にはAI機器等の浸透によって人の身体技術の獲得機会はさらに低下すると予想されている。

この研究では身体技術能力の発達・退行がどのように社会・自然環境と相互作用をもち、変容するかを通人類史的観点から実証的に探求する。筆者が今までに蓄積してきた東南アジア地域に分布する諸民族（遊動狩猟採集民のサロン、近年定住化が進む狩猟採集民のムラブリ、山地民社会のカヤン、カヨー、ナーガ、東南アジアの農村、より都市化の進んだ東南アジアの都市、情報化の進んだ日本など）の3歳から18歳までの子どもの調査データを用いてこれらの問題に接近する。

研究課題　基盤研究（B）　2019-2023

二言語を同時習得する日系国際児の日本語作文力の発達過程の解明

〈研究代表者〉柴山　真琴　　家政学部

複数言語能力は、グローバル人材に求められる基本的能力の一つである。平日は現地校に通い週末のみ日本語補習授業校（以下、補習校）に通う海外在住の小中学生数は、平成29年度で21,458人に達している。補習校通学児は、将来のグローバル人材として期待されているが、現地語と日本語の両方で教科学習に必要な読み書き力を形成することは容易ではない。学校言語である現地語（子どもにとっての「優勢言語」）と比べると、接触の質と量や使用の機会が不十分な日本語で、いかに読み書き力を育成するかが補習校教育の重要な課題となっている。このように日本語で読み書き力を習得することは、今や日本国内で生まれ育つ日本語母語児だけの課題ではなくなり、日本語を複数言語の1つとして習得する子どもにとっても重要な課題となっている。

我々は、補習校通学児の読み書き力の発達過程が十分に解明されていない研究状況を踏まえ、Ⅰ期研究（H22-25年度基盤研究（B））とⅡ期研究（H26-30年度基盤研究（B））において、補習校通学児の中でも特に日本語力を伸ばしにくい国際結婚家族の子ども（以下、国際児）に注目して、国際児の二言語習得過程とそれを支える家族の実践過程を解明してきた。特にⅡ期研究では、独日国際児への予備調査（小4→小6の縦断的作文調査）を通して、対象児の日本語作文力の発達過程の特徴として、＜母語児の発達過程を単に約2年遅れで辿るだけではなく、母語児に見られない固有の特徴（表記の間違い、漢字語彙の不足による不適切な表現など）がある＞ことを見出したが、こうした特徴には優勢言語がドイツ語（アルファベット言語）であることが影響していると推察された。

そこで、Ⅲ期研究（今回採択された課題）では、優勢言語が異なる国際児（①ドイツ語を優勢言語とする独日国際児、②中国語を優勢言語とする台日国際児）を対象に、3時点（小2→小4→小6）での縦断的作文調査を行い、二言語の同時習得が日本語作文力の形成に及ぼす一般的な影響と、優勢言語や現地校の作文教育による固有の影響を解明することを目指している。これにより、優勢言語によって伸びにくい側面を予測でき、補習校の作文指導の改善に役立つ知見を提供することが期待できる。

研究課題　基盤研究（B）　2019-2022

ゲーミフィケーション・機械学習を利用した幼児の自己身体認識評価課題の開発と評価

〈研究代表者〉宮崎　美智子　　社会情報学部

本研究における中心的な問いは、幼児は自己の身体表現、特に固有感覚（特に位置覚・運動覚）をベースとした身体地図（body topography）をどのように獲得するのだろうか、である。たとえば、私たちが鼻を触ろうとするとき、鼻が見えなくてもある程度正確に鼻の位置を特定できるが、これは固有感覚ベースの身体地図を心的に獲得しているからである。

これまでに行われた身体地図の発達過程の検討は、課題の難しさと冗長さから、幼児の能力を過小評価してきた可能性が高い。そこで我々が着目したのは、ゲーミフィケーションである。具体的には、自己映像の身体各部位に拡張現実（AR）を用いてマークを表示し、幼児が実物の自己身体に対応づけて当該部位を定位できるかを評価するゲームの様な課題を開発する。私たちはすでにプロトタイプとして、Microsoft Kinectの顔検出と拡張現実（AR）を用いた課題を開発し、2歳～3歳の幼児に適用できることを確かめてきた。プロトタイプ開発で使用したMicrosoft Kinectによる骨格検出では、身体の小さな幼児の骨格検出は外れやすく、マークが時折表示されなくなったり、親子で並ぶと一人に判定されてしまったりなど、不安定の問題があった。

そこで本研究では、画像解析のみで骨格推定が可能なOpenPoseという画像処理技術を使用して全身拡張版の新課題を実装、妥当性の評価を行う。幼児の映像を機械学習させることによって、オリジナルの幼児骨格推定プログラムを生成する。この骨格推定プログラムを利用すれば、課題は克服され、より精度を上げてリアルタイムに被験児の顔にARを表示させることができると考えた。また、GPU（画像処理装置）が搭載されたグラフィックス処理能力の高いPCを利用すれば、リアルタイムの骨格推定も可能である。この課題開発・評価を通じて、幼児期初期に特有の自己／他者身体表現獲得の発達過程と獲得メカニズムに迫る。本研究は、ATRの浅井智久氏と日本女子大学の麦谷綾子氏との共同研究である。

研究課題　基盤研究（C）　2019-2021

ジョブコーチの知識及びスキルの明確化と職能評価基準の開発に関する研究

〈研究代表者〉小川　浩　　共生社会文化研究所、人間関係学部

国等の公的部門において障害者雇用の水増しが明らかになり、障害者雇用の問題が注目を集めたことは記憶に新しい。その際も、単に障害者雇用を進めるだけでなく、ジョブコーチ等を活用して雇用後に定着を図ることの重要性が議論された。事実、障害者雇用の経験の浅い事業所においては、雇用後に障害のある人、雇用主及び職場の従業員等をサポートする専門的支援なくして、質の高い障害者雇用を実現することは難しい。そのような社会的課題を背景に、本研究は、障害者就労支援及び障害者雇用に関する専門職員である「ジョブコーチ」に焦点を当てるものである。

障害者就労支援の専門職員である「ジョブコーチ」は、1986年に米国において「援助付き雇用（Supported Employment）」として誕生し、我が国では2002年に職場適応援助者（ジョブコーチ）として制度化された。実践においてはその効果と必要性が認められているが、我が国では実証的研究が少ないことから、その職務内容及び必要な知識・スキルの体系化が十分行われていない。そこで本研究は、ジョブコーチに必要な知識及びスキルの要素と構造を明確化すると共に、対象者の障害種、ジョブコーチの種別等による違いを明らかにし、現行のジョブコーチ養成カリキュラムについて修正を提案することを目的とする。第一段階では、ジョブコーチ養成研修修了者を対象にインタビューで得られた知見を米国の認定就労支援専門員（CESP）のテスト項目を参考に整理し、日本版ジョブコーチ職能チェックリストを開発する 。第二段階では、そのチェックリストを基にジョブコーチ約500人に質問紙調査を行うことで、障害種、ジョブコーチの所属機関等の基準で、ジョブコーチに必要な知識及びスキルの要素と構造を明確にする。そして第三段階では、ジョブコーチ養成カリキュラムに取り入れるべきポイントを明らかにする予定である。

研究課題　基盤研究（C）　2019-2021

日本近現代文学におけるメロドラマ的想像力の展開に関する多角的研究

〈研究代表者〉木戸　雄一　　文学部

近現代の日本において、メロドラマの物語はどこで、どのように語られ、どんな世界を表象し、どんな文化政治的機能を担ってきたのでしょうか。本研究では、日本近現代文学作品とその関連テクストを「メロドラマ的想像力」という観点から捉え直すことで、その時系列的な展開とメディア環境との相関を考究します。合わせて、メロドラマの物語空間を複数のイデオロギーが葛藤・抗争する混淆的な言説の場と位置づけ、日本近現代文学研究の知的蓄積を、大衆的な物語の形式で提示された文化表象の歴史性・政治性に批判的に介入する学知として発展させることを目指しています。

研究は、三つの研究班によって行われます。機能班は、メロドラマという形で提示された文化表象の歴史性とそのイデオロギー的な機能について検討します。空間班は、メロドラマ作品が描き出す移動と空間の表象を内在的に分析し、大衆的な物語文化の中に刻みこまれた心象地理と歴史意識をあぶり出すことで、同時代のメディア環境や近代日本をとりまく歴史＝地政学的な構造変化との関連を批判的に検証します。アダプテーション班は、ジャンルやメディアを跨ぐことで、差異をはらみながら生産／再生産された「メロドラマ的想像力」の多様なあらわれとその特質を明らかにします。三つの研究班は、相互に学び合いつつ研究を進めます。

2019年度は、「研究の離陸期」と位置づけ、アダプテーション班を中心に活動します。2020年度は、「研究の展開期」として、空間班を、2021年度は、「研究の総合期」として、機能班を中心として活動します。

研究成果の発信も積極的に行います。学術図書の出版も念頭に各学会でのグループ発表にエントリーします。また、国際的なワークショップの開催も行う予定です。

研究課題　基盤研究（C）　2019-2021

対話的アプローチを用いた発達障がい児に対するチーム支援プログラムに関する研究

〈研究代表者〉高橋　ゆう子　　児童臨床研究センター、家政学部

子どもの貧困やいじめ、不登校、特別支援など学校教育の課題が多様化・複雑化する状況に対応するため、平成27年12月に中央教育審議会答申「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」（以下、「チーム学校」答申）が出された。「チーム学校」実現のために、専門性に基づくチーム体制の構築や学校のマネジメント機能の強化が検討されているが、「チーム学校」と家庭、地域、関係機関との関係については「家庭や地域社会を巻き込み、教育活動を充実していくことが大切である」とされているものの、具体的な改善方策はまだ示されていない。

そこで本研究では、発達障がい児への教育、支援における「チーム学校」について、チーム支援プログラムの検討、開発を行うことを目的とする。具体的には「支援関係者チーム」と「家族のチーム」を想定し、社会ネットワークの視点と社会文化的視点からそれぞれチームメンバー間の対話を促すアプローチを実践し、検討する。前者の「支援関係者チーム」支援については、当事者も含めたチームメンバー間の対話を促すアプローチとしてフィンランドで開発された「未来語りのダイアローグ（Anticipation Dialogue）」を用いる。これは、近い将来の状況に対する不安を減らして、具体的に実現可能な計画を練ることを重視したミーティングである。後者の「家族のチーム」への支援については家族メンバー間の対話を促すために対人関係発達指導法（Relationship Development Intervention）を用いて、安定した親子の情緒的関係、「育つ・育てる」という関係の築き直しを図る。

この二つの対話的アプローチの有用性として共通するのは、対話の場に身を置くことの不確実性に耐えつつ、その状況を共有することで新たな関係性を築き、協働体制が取りやすくなる点である。このような特徴をもつ対話的アプローチを関連付けたチーム支援の検討は、発達障がい児やその家族への心理社会的支援研究においても新しい視点を提供するものと考える。

研究課題　基盤研究（C）　2019-2021

企業―ステイクホルダー関係における媒介者の機能・パワー・正当性に関する研究

〈研究代表者〉山倉　健嗣　　社会情報学部

企業がいかにステイクホルダーとの関係を形成、展開、変革していくのかは理論的にも実証的にも重要な課題です。企業とステイクホルダー関係、両者を仲介する媒介者（intermediary）に関する既存の研究（経営学、組織間関係論、新制度理論、社会学、経済学など）についてサーベイし、その現状を明らかにし、解明されていない課題を提示します。本研究では、企業とステイクホルダー関係における媒介者に焦点をあてます。媒介者がなぜ必要なのか、いかなる機能を果たしているのか、機能を果たすうえでパワー・正当性をいかに獲得していくのかを明らかにすることを目指します。企業はいかなる取引相手を選択するのか、提携相手として選択するのか、財・サービスを評価するのかにとって、媒介者に注目することが必要です。媒介者を通じて企業とステイクホルダーの関係がいかに形成・展開・変革するのか、媒介者と企業・ステイクホルダーとの関係を構築していくのかを解明します。また媒介者を通じて製品の価値が創造・評価されるプロセス、取引・提携が形成・展開・変革していくプロセス、複数の組織の調整プロセスも明らかにします。

本研究を実証的に推進するために、すでに研究を進めてきた飲料業界、自動車業界だけでなく、財・サービスの客観的評価が難しい業界である音楽業界・映画業界も対象に、取引・提携・共同組織・評価機関などについての研究を行います。企業とステイクホルダーとの関係において、媒介者に注目している研究は少なく、その機能が単なる連結機能なのか、正当性付与機能なのかを問う意味は大きいといえます。特に取引される財・サービスの価値を客観的に評価することが難しい業界では、媒介者という視点から、批評家、メディア、評価機関などを見直すことにもなります。こうした研究を通じて、媒介者を組み込んだ企業―ステイクホルダー関係のプロセスモデルを構築することを目指しています。

研究課題　基盤研究（C）　2019-2021

日本関係の近世ラテン語文学 ―成立の文脈と未校訂写本の研究―

〈研究代表者〉**渡邉　顕彦**　　比較文化学部

ヨーロッパの古典文学というと、シェイクスピア等が思い浮かぶかもしれませんが、実は各国語（民衆語・俗語）で書かれた作品が学問的な研究対象とされるようになったのは早くて18世紀であり、それまでヨーロッパの知識人が学習・研究し、彼ら自身の著作の模範としたのはギリシア・ローマの古典でした。また少なくとも19世紀半ばまで、イギリスやドイツ、フランスだけでなくポーランドやスロバキアを含むヨーロッパの大部分の知識人はギリシア・ローマの伝統を意識した擬古典ラテン語で学術書だけでなく小説や詩、劇などを数多く創作し楽しんでいました。19世紀以降、いわゆる新ラテン語（英Neo-Latin、独Neulatein）で書かれた文学は各国語文学の陰に隠れ、忘れられてきましたが、近年（特に1990年代以降）その価値が再確認され、ヨーロッパの特にドイツ語圏を中心に活発に調査研究されるようになってきています。

近世ラテン語文学中の日本関係作品も実はかなり分量があり、ジャンルも劇、叙事詩、地理、歴史作品等多岐にわたります。先行研究もヨーロッパを中心に相当量あります。今回採択された私の研究ではこのような作品群で特に未校訂写本で残るもの数点の内容と成立過程を精査します。16～17世紀の日本でイエズス会がカトリック宣教を主導した関係で、ヨーロッパ各地の文書館等には同会学校で創作された多数の日本が登場する劇、詩、対話篇などの手稿が残存していることが報告されています。これらの内容を正しく記録、理解し、また評価するためには、一方でギリシア・ローマ古典から派生した擬古典ラテン語、他方である程度の近世日本史の理解が欠かせません。この研究を通じて、古典の言語や文体、ジャンル規範をしっかり守りつつ同時に雑食性や創造性も豊かであった近世ヨーロッパ古典文化の理解が多少とも深められ広められれば幸いです。

研究課題　若手研究　2019-2022

学校建築の社会学的研究

〈研究代表者〉**牧野　智和**　　人間関係学部

かつて、文化人類学者のトーマス・P・ローレンは、日本の学校建築を「いっさいの装飾を永久に禁じられている」とさえ思わせる「兵舎」「戦艦」のように殺風景な建物だと論じていました。ここまで極端ではなくとも、学校建築に対してこのような無味乾燥で単調な建物という印象をもつ人は少なくないでしょう。しかし、学校建築を専門とする建築学者を中心に、学校建築の革新を目指した研究や言論発信は戦後連綿となされ続け、その活動の成果は1984年の多目的スペース設置への補助制度の導入や、今日少なからず見ることのできる、新しい空間構成を備えた、デザイン性も高い学校建築へと結実してきました。

しかし、このような状況にもかかわらず、学校建築・学校施設への一般的・学術的関心は未だ総体としては低く、結果としてハードウェア環境としての学校が今日いかなる状況にあり、児童生徒の学習・生活にいかなる影響を与えているのかは、建築学の領域を超えて議論されることはあまりありません。そこで本研究では、教育学・社会学的な観点から「今日のハードウェア環境としての学校建築がどのような趨勢に向かい、児童生徒にどのような学習・生活上の影響を与えるべく設計・運営されているのか」という検討課題に取り組もうとしています。

ただ、このようなスタンスは、建物が教育環境を決定するという技術決定論に対して、その背景にある教育的意図や社会的利害、政策などこそがより重要だとする立場をとるわけではありません。本研究では、技術、社会、あるいは言説のいずれかに事態を還元するのではなく、行政上の施策の展開、建築学上の研究と実作の展開、それらを踏まえつつ望ましい教育のあり方とともに学校建築のあり方が示される言説の展開を、それぞれの関係性を考慮しながら総合的に把握し、「ハイブリッド・デザイン」としての学校建築の現在について考えようとするものです。

研究課題　若手研究　2019-2021

ショールーマーとリバース・ショールーマーのアパレル商品情報の探索と購買行動の研究

〈研究代表者〉吉井　健　　家政学部

近年、リアル店舗、ネット店舗等のあらゆるチャネルを連携させたオムニチャネル戦略を推進するアパレル小売事業者が増えている。この背景には、スマートフォンの発展がもたらした、ショールーミングやリバース・ショールーミング等の多様な消費者行動の登場が挙げられる。ショールーミングとは、消費者（ショールーマー）がリアル店舗をショールーム代わりにして商品と価格を確認した後で、ネット店舗で購買する行動であるが、リバース・ショールーミングとは、消費者（リバース・ショールーマー）が外部サイトをショールーム代わりにして情報探索を行い、リアル店舗で購買する行動である。

インターネット等の通信販売でのアパレル商品の購買に関しては、サイズ、素材感、実際の色、着心地、そして似合い等の実物確認が出来ず、消費者は知覚リスクを認識することから、元来、アパレル商品の購買は、通信販売よりもリアル店舗での購買が主と言われてきた。しかし、2010年以降のスマートフォンの発展により、消費者の情報探索と購買の行動が劇的に変化してきたこと、そして、インターネット購買に際する知覚リスクを低減させるサービスを実施するネット店舗が増えてきたこと等から、ネット店舗でのアパレル商品購買が急増してきた。現代の消費者が、満足度を高めてアパレル商品を選択して購買し、豊かな衣生活を育むためにも、アパレル小売事業者は、その情報探索と購買の行動を正確に把握した上で、マーケティング施策を構築しなければならない。

そこで、本研究では、アパレル商品を購買するショールーマーとリバース・ショールーマーの購買行動の解明に目的を置き、それらにおける、①情報探索と購買のプロセス、購買商品・価格帯、そして満足するサービスの傾向、②SNS等の情報への満足度傾向、③ビジュアル・マーチャンダイジング（VMD）への満足度傾向の実証研究を行っていく。

研究課題　若手研究　2019-2021

公民権運動期以降のアフリカ系アメリカ文学における身体的経験としての痛みと親密性

〈研究代表者〉石川　千暁　　文学部

近年、瞑想やヨガの有用性がさまざまな研究によって示されています。トラウマ臨床研究の見解によれば、患者にとってトラウマは、観念的な記憶としてではなく、現在の身体的な感覚として経験されます。そのためトラウマから真に癒されるためには、混乱をもたらす感情の下にある身体的感覚が一過性のものに過ぎないと実感することが必要なのですが、瞑想やヨガの実践は、そうした気づきを深める上できわめて有効なのです。

こうした科学的知見は、熱心なヨガと瞑想の実践者である私自身が実感している、心身のとらえ方の根本的な変化と、それにともなって得られた健やかさを説明するものでもありました。そして専門領域である文学において、このような精神と身体の結びつきはどう描かれて来ただろうか、という問題意識を持つようになったのです。

本研究は、痛みがどのように言語化されてきたかという視点に立って、公民権運動期以降のアフリカ系アメリカ文学の読み直しを図るものです。ノーベル賞作家トニ・モリスンなどの作品における身体的な痛みの表象を、上に述べたような科学的知見を取り入れながら分析することを目的としています。

これまでのアメリカ文学研究においては、人間の精神性や観念的な思考が好まれる傾向があったため、精神的な苦痛はさまざまに論じられてきた一方で身体は顧みられないことが多く、論じられる際にも実感をともなった現実としてではなく、言語によって構築された観念として扱われてきました。

本研究では、脳科学や精神医学で主張されている「記憶する身体」という視点から文学作品を読むことで、観察眼、表現力ともに優れた作家たちが、科学が明らかにしつつある心身のつながりをずっと以前から描いてきたのだということを明らかにします。またその過程で、癒しにおける身体的接触や親密性の重要性を理論化し、セクシュアリティ研究にも新たな展開をもたらすと期待することができます。

研究課題　若手研究　2019-2021

不況の知覚が内集団の範囲を狭めて曖昧成員への攻撃を促進するプロセスの解明

〈研究代表者〉竹部　成崇　　文学部

近年、イギリスでEU離脱が決まり、アメリカではイスラム入国禁止令が支持されるなど、反グローバリズム的な風潮が世界的に見られ、規模の大きい集団が、それを構成する下位集団へ分裂する傾向が強まっています。こうした風潮は様々な摩擦を引き起こす可能性があり、実際に暴動が増加している地域もあります。

心理学領域の研究は、こうした現象の背後に、不況の影響がある可能性を示唆しています。具体的には、不況を知覚すると、内集団成員か外集団成員か曖昧な人物を、外集団成員と判断しやすくなることが示されています。これは、歴史的経緯などの個別具体的な文脈を排除しても、不況を「知覚」するだけで内集団の範囲を狭める認知傾向が人に備わっていることを示す重要な知見です。

他方、どのようなプロセスで不況の知覚が内集団の範囲を狭めるのかは、未解明です。また、不況の知覚が、昨今世界各地で起きているように、曖昧成員への攻撃にまで影響を及ぼすかどうかも、未解明です。攻撃は対象から報復攻撃される危険性を伴うことを考慮すると、内集団の範囲を狭め、曖昧成員を外集団成員とみなしたとしても、それが直接的に曖昧成員への攻撃を促すとは考えにくいです。不況の知覚はどのようなプロセスで内集団の範囲を狭め、曖昧成員への攻撃を促進するのか。これが本研究の核心をなす問いです。

本研究ではこのプロセスについて、不況の本質である「集団全体の資源の減少」と「将来の不確実性」、および、「内／外の境界に関する認知と現実のギャップ」に注目した仮説モデルを立て、これを複数の実験を通じて検証します。問題が生じるプロセスの解明は、問題の改善・予防の糸口となるため、本研究は、不況の知覚が人の認知や行動に及ぼす影響に対する理解を深める研究であるとともに、昨今の反グローバリズムとそれに伴う暴動の改善・予防の糸口となる研究としても位置づけられると考えています。

研究課題　若手研究　2019-2022

理想的観賞者説の改訂・展開による、複合文化的な美的経験論の構築

〈研究代表者〉森　功次　　国際センター

伝統的な美学・芸術哲学は、美的価値や芸術的価値を説明するにあたって、理想的観賞者（ideal appreciator）をモデルとして立ててきた。観賞や判断の基準を説明するにあたって、特定の能力（繊細な知覚能力、美術史の知識、十分な批評経験など）を備えた適格な観賞者を想定し、その者が行なうであろう観賞・判断を正しい観賞・判断とする――このような説明手法を「理想的観賞者説」と呼ぼう。

だが、価値観が多様化した現代において、この説明手法ははたして有効だろうか。そこで想定されている理想的観賞者は、あまりに理想的すぎたのではないか、そしてそのために、理想的観賞者説は、われわれ凡人の日常的な判断・ふるまいを説明できない説になってしまっているのではないか？これが本研究の出発点となる問いである。

とはいえ、理想的な判断の想定を安易に捨て去り、各人の美的判断をすべて正しいとするような「なんでもあり」の美学理論は、それはそれで使い物にならない。従来の理想的観賞者説は、とりわけ判断の規範性・妥当性を説明するさいには、とても使い勝手がよいのである。

そこで本研究では、従来の理想的観賞者説を改訂し、現代の多様化した文化状況を説明するための新たな美的判断論を構築したい。本研究は、まず従来の理論を1）理想的観賞者にはいかなる能力が求められてきたのか、2）理想的観賞者の想定がわれわれのふるまいにどう影響するのか、3）なぜ凡人は理想的観賞者を尊重せねばならないのか、といった観点から批判的に読み解くことで、従来の説の利点と弱点を明らかにし、さらに、その分析をふまえた上で、B級趣味や愛着的収集といった、現代の多様なふるまいを適切に説明できる新たな枠組みを構築する。

もはや、特定の美意識を押しつける芸術教育や、皆の趣味を無批判に尊重する感性教育は改められねばならない。本研究は、現代の多元文化的状況にそくした新たな感性教育の道を開くきっかけとなるだろう。

大妻女子大学　戦略的個人研究費

大妻女子大学教員の研究活動の活性化・高度化、競争的外部資金への応募促進を目的とした助成制度です。助成の対象は、本学の専任教員による個人研究。2014年に新設され、人間生活文化研究所は、本学研究支援室と協働して管理・運営に当たっています。

2019年度 大妻女子大学戦略的個人研究費 採択課題

■ 学長要望課題「大学教育の質的向上に関する研究」（4件）

氏　名	所　属	研究課題
石川　千暁	文学部	心身のウェルネスを重視した女子教育論の構築
西河　正行	人間関係学部	正課外教育を活用した精神的健康促進の試み
服部　孝彦	英語教育研究所	大妻女子大学における全学英語 e ラーニング・システムを活用した英語教育発展の可能性
深水　浩司	教職総合支援センター	RFID を用いた図書館での利用者位置情報取得に関する実験

■ 一般課題（35件）

氏　名	所　属	研究課題
青江　誠一郎	家政学部	全粒穀物の摂取が回腸内代謝に及ぼす影響
赤松　美和子	比較文化学部	地域研究の学術的知見を活用した高校台湾修学旅行支援の研究
五十嵐　浩司	文学部	Disaster Reporting としてのルワンダ大虐殺報道の国際比較
石井　千麻	人間関係学部	福祉施設でのサークル活動による離職予防と人材育成の効果
井上　淳	比較文化学部	「漸進する統合」のメカニズム：欧州通貨協力からユーロそして「真の EMU」へ
大網　美代子	家政学部	持続的デザインシステムを用いた高齢者衣服とストレスコントロールの検討Ⅱ
桶田　敦	文学部	福島第一原発事故報道のキー局とローカル局のニュース編集における議題設定の比較研究
加藤　奈保美	家政学部	私立幼稚園における巡回相談のあり方と活用に関する研究 ―自閉症スペクトラム症児のこだわり行動に着目して―
金田　卓也	家政学部	ネパールの村落における社会関与型アートプロジェクトと芸術教育
樺山　敏郎	家政学部	読解を経由する記述力に関する研究―全国学力調査の記述式問題の思考プロセスの解明―
金　美辰	人間関係学部	老人福祉館の利用実態と介護予防との関連性
小井土　守敏	文学部	仮名本『曽我物語』注釈――説話を中心に――
小関　右介	家政学部	環境 DNA 技術を用いた淡水魚類の集団遺伝構造の解明
佐藤　実	比較文化学部	『神相全編』の人相術的思考に関する文献考証学的研究
須藤　良子	家政学部	絣織物に関する研究―沖縄とアジアとのかかわりを中心に―
銭　国紅	比較文化学部	清末民国における革命的文化観の生成と転換
高波　嘉一	家政学部	健常若年女性における食後糖脂質代謝障害の実態と原因の究明
髙橋　ユリア	短期大学部家政科	一人の食事は寂しいのか？―フードコーディネートの観点から―
田中　直子	家政学部	ショウガオールが骨格筋細胞の「質」に与える影響
趙　方任	国際センター	中国宋代喫茶文化の美意識研究
手呂内　伸之	短期大学部家政科	サイトカイニンシグナル伝達系と根粒形成の関わり合い
中川　麻子	家政学部	明治時代の美術染織にみる孔雀図案の系譜
中村　邦子	短期大学部家政科	2014-2016 日本人の人体計測データの分析―重回帰分析による男性の体型推定―
林原　泰子	家政学部	バウハウスにおけるデザイン教育に関する研究
福島　哲夫	人間関係学部	心理療法の異なった 3 技法の効果比較と介入順序効果に関する研究
藤井　直子	家政学部	イギリス全国最低賃金法の研究―全国一律額方式の実現とその後―
藤本　優	人間関係学部	CBID の視点を活用した知的障害者の地域参加モデルの開発
古市　孝義	人間関係学部	介護職員が受けるハラスメント行為に関する調査
古田　雅明	人間関係学部	中堅心理臨床家のキャリア形成プロセス
干川　剛史	人間関係学部	東日本大震災被災地（気仙沼市及び南三陸町）における復興に関する調査研究
細谷　夏実	社会情報学部	身近な生活の中で学ぶ新たな海洋教育「海育（うみいく）」の提案
堀江　正一	家政学部	市販鶏肉中のサルモネラ及び大腸菌の薬剤耐性率と残留抗菌剤との関連性
森　功次	国際センター	初期分析美学における美的機能説・美的態度論の再検討
守田　美子	文学部	「役割語」のコミュニケーション機能と日英語比較の授業実践
山蔦　圭輔	人間関係学部	摂食障害予防のための基礎的研究 2

人間生活文化研究所 研究費助成事業

人間生活文化研究所では、大妻女子大学教職員、大学院生、研究員を対象に、さまざまな研究費助成制度を設けています。

共同研究プロジェクト

学内における研究者間の交流の促進、新たな研究課題の発掘、競争的外部資金への応募促進を目的とする助成制度です。助成の対象は、本学の専任教職員を代表者とする共同研究。異分野の研究者で構成されるこのプロジェクトでは、2008年度からこれまでに276の研究課題が遂行されてきました。

■ 2019年度 共同研究プロジェクト　採択課題（27件）

研究代表者	所　属	研究課題
青江　誠一郎	家政学部	咀嚼嚥下困難高齢者への大麦粥の食事介入による腸内細菌叢の改善効果の検証
阿部　栄子	家政学部	本学における和服裁縫技術の解明
伊藤　みちる	国際センター	異なる出身国のアジア人大学生群は協働学習環境において異なる学習経験をするのか
岩瀬　靖彦	家政学部	卒業後のキャリア形成に及ぼす要因の検討（2）
大網　美代子	家政学部	金子量重コレクション衣分野の調査研究―見ることの力へアプローチする実物資料―
小川　浩	人間関係学部	就職に困難を抱えるグレーゾーンの学生を対象とした、ICT 活用による情報共有支援ツールの開発
金田　卓也	家政学部	アジアの村落開発における伝統的な知識や技術を生かした教育の可能性についての研究
小林　実夏	家政学部	青年期タイ人の体格、生活習慣、食習慣、身体的・精神的健康度等の相互関連性
是澤　博昭	博物館	大妻女子大学博物館の施設と所蔵資料を活用した大学教育の可能性に関する基礎的研究Ⅱ
柴山　真琴	家政学部	泰日国際家族における親の「教育戦略」の特徴とその影響要因の解明
須藤　良子	家政学部	大妻女子大学博物館所蔵の染織資料の基礎調査―アジアおよび日本の染織品を中心に―
関本　紀子	文学部	「計量」から見る東南アジア社会：伝統文化の継承とその背景
髙垣　佐和子	大妻コタカ・大妻良馬研究所	大妻精神の継承と具現―聞き取り調査を通じ大妻の教え・学びを探る 4―
田中　優	人間関係学部	汎用版避難所運営訓練システム開発の予備的研究
趙　方任	国際センター	モンゴル族の喫茶文化の考察と研究
中川　麻子	家政学部	「大妻らしさ」と快適な学生生活に対する学生意識の調査（2）
服部　孝彦	英語教育研究所	小学校英語教育における教員の資質能力向上研修プログラムの開発に関する研究
林原　泰子	家政学部	日本における 3D プリンタの普及と教育への導入
平井　郁子	キャリア教育センター	古代布の調査・研究 蓮繊維の紡績・染織技術の歴史と産業応用の可能性への研究（その2）
細谷　夏実	社会情報学部	中学校理科における「海の生きもの」を活用した教材開発の試み（2）
堀江　正一	家政学部	食品添加物の安全性と消費者の不安に関する研究
本郷　健	社会情報学部	プログラミングの学習が神経可塑的変化に与える基礎的研究
本田　周二	人間関係学部	女子大学における教育カリキュラムの体系化―国家資格による変化に着目して―
松村　茂樹	文学部	台湾の服務文化についての総合的研究
水谷　千代美	家政学部	弱酸性ポリエステル繊維の抗かゆみ活性と睡眠の質との関係
矢野　博之	家政学部	大学退学についての基礎的研究（その2）
吉井　健	家政学部	レトロファッション志向の分析とマーケティングの検討―若者の消費文化の研究―

研究員研究助成

人間生活文化研究所研究員の競争的外部資金への応募を促進することを目的とした助成制度です。この制度は、2014年度より競争的研究費として再出発しました。

■ 2019年度 研究員研究助成　採択課題（3件）

研究代表者	研究課題
仁科　薫	現代日本における子育て規範の変容と母親たちの困難
戸田　里和	生涯設計のための女子教育に関する研究
中西　純	子どもの菜食は発育にどのように影響するか

大学院生研究助成

大妻女子大学大学院の教育・研究を高度化、活性化することを目的とする助成制度です。この制度は、人間生活文化研究所の協賛企業からの賛助金により運営されています。

■ 2019年度 大学院生研究助成（A） 採択課題（2件） 対象：人間文化研究科 博士後期課程在籍者

氏　名	所　属	研究課題
伊藤　陽子	人間生活科学専攻	歯科における管理栄養士関与の有用性に関する研究
坂上　幸	言語文化学専攻	戦後の時代性を如何にとらえるか――太宰治「斜陽」の本文生成

■ 2019年度 大学院生研究助成（B） 採択課題（28件） 対象：人間文化研究科 修士課程在籍者

氏　名	所　属	研究課題
阿相　優香	人間生活科学専攻	各種ミルクが卵加熱ゲルの物性に及ぼす影響
江部　優奈	臨床心理学専攻	他の介入技法との関連におけるコンパッション・フォーカスト・セラピーの効果
大竹　那実	人間生活科学専攻	マウスのメタボリックシンドローム関連指標に及ぼす穀物繊維とプロバイオティクスの組み合わせ効果
加藤　彩夏	臨床心理学専攻	大学生の被援助志向性が大学不適応に及ぼす影響
川野　祐理子	言語文化学専攻	移動の文学とディアスポラ――温又柔研究
小西　広実	人間生活科学専攻	百貨店における販売教育の変遷と消費者が持つアパレル販売員のイメージ
佐藤　知香	臨床心理学専攻	周産期における喪失体験への心理的ケア―心理職の独自性と役割に着目して―
白鳥　快枝	言語文化学専攻	『大斎院前の御集』に見る斎院の暮らしと歌
鈴木　真理子	人間生活科学専攻	膵臓β細胞における脂肪毒性の可視化：毒性を緩和する食品成分の探索に向けて
鈴木　茉莉子	言語文化学専攻	『建礼門院右京大夫集』における平資盛の形象
須藤　優希	臨床心理学専攻	女子大学生における友人関係の取り方、ソーシャルスキル、居場所感のなさの関連について
仙田　悠紀乃	言語文化学専攻	太宰治『斜陽』における滅び――天皇制を中心に――
宗　杏佳音	臨床心理学専攻	親子関係における情緒的自律性の獲得が心理的側面に及ぼす影響
高橋 孝太	人間生活科学専攻	養成施設における給食管理実習の概要と給食施設での栄養士業務との差異について
土井　玲奈	人間生活科学専攻	妊婦の健康な食事に関する評価方法の開発と食認識・体型認識との関連
樋田　琴乃	臨床心理学専攻	月経随伴症状に対する心理教育プログラムの開発―首尾一貫感覚向上を目指した介入―
並河　香代子	人間生活科学専攻	保育所で提供されている幼児食に関する調査
板東　愛理香	人間生活科学専攻	遊びの場面における深刻事故のメカニズム―子どもの発達プロセスに着目して―
福田　沙織	人間生活科学専攻	咀嚼嚥下困難高齢者への大麦粥の食事介入による腸内細菌叢の改善効果の検証
星野　優芽	人間生活科学専攻	0歳児クラスの子ども理解における保育者の視線の役割
増田　有紀子	臨床心理学専攻	障害児・者のきょうだいの障害受容過程―障害児・者のきょうだいの語りから読み解く―
松家　麻記子	人間生活科学専攻	パネルシアターの制作および演習を保育者養成課程に取り入れる意義と教育効果について
三尾　建斗	人間生活科学専攻	マウスを用いた大麦摂取による糖代謝・脂質代謝に関する臓器内のクロストーク解析
毛利　英美子	人間生活科学専攻	特定保健指導において管理栄養士に求められるスキルに関する研究
桃﨑　沙耶	臨床心理学専攻	進路選択における親子間葛藤が対処方略に与える影響
守屋　早希子	人間生活科学専攻	平織布「銘仙」の特徴と着ごこちの解明
山田　真衣	言語文化学専攻	後置修飾構造の定着度とその配列
吉越　里桜	言語文化学専攻	中国のスマートシティ化

競争的外部資金の獲得支援事業「科研塾」の開催

科研塾

第１回科研塾「テーマ：学内競争的資金（戦略的個人研究費※：SKK）の獲得から科研費獲得へ」

通称SKKの申請受付開始日と同日（4月5日）に、人間生活文化研究所は研究支援室と協働して、学内教職員、大学院生、研究員の方々を対象に、科研塾を開催しました（参加者41名）。科研費（日本学術振興会）の本年度採択結果の発表から4日後の開催でした。

講師の大澤所長からは「本学が学内の研究者を支援するSKKを次年度科研費獲得の呼び水としてほしい」とのお話しがありました。さらに「当研究所では科研費獲得のための様々な研究支援ツール―研究成果を公表する場としてのオンラインジャーナル、電子書籍の発行など―を用意しているので是非ご利用いただき科研費獲得に繋げてほしい」とも加えられました。

※戦略的個人研究費：大妻女子大学の学内競争的資金。2014 年度より研究支援室（2018 年度総務グループから独立）と協働して、人間生活文化研究所が運営している。

４月５日開催の第１回「科研塾」の様子

第２回科研塾「テーマ：敵を知り己を知れば百戦殆うからず（孫子）」

7月4日に開催された本年度第2回目の科研塾には48名の方々が参加されました。

前半は、2018年度に行われた「科研費改革」のうちの審査サイドの解説（審査要領、審査評定について）に力点を置いた解説が行われました（講師は先端科学技術研究支援協会久保陽介理事長）。それを受けて後半では大澤所長より申請者サイドの話として「申請者が陥りやすい申請書の誤った書き方、パターン」について幾つかの実例を挙げて説明がありました。「敵を知り己を知れば百戦殆うからず（孫子）」ともいわれるように、この日の科研塾は、科研費申請には戦略を立てて臨むべし、というメッセージが込められていました。

講義のポイント

研究計画調書を執筆するにあたって…

「現状を調べる」という記述では弱い―

「何らかのパフォーマンスをします」では評価できない―

【2019年度SKKに採択された方へのお知らせ】

2019年度研究計画調書にたいする外部専門家による「総評（科研費申請のための改善コメント）」を通知しています。お手元に届いていない方はお尋ねください。

【今秋公募される科研費に申請される方へのお知らせ】

■ 次回「科研塾（第3回）」の開催日程等。

9月24日（火）16時半より。

開催場所：千代田校E棟11階会議室2及び多摩校図書館棟2階会議室1、2（多摩校ではテレビ会議システムを使用します）。申請直前の開催となります。是非、ご参加ください。

■ 科研費申請に関する個別相談は随時受け付けています。

問い合わせ先 ▶ 03-5275-6047（千代田キャンパス内線 5650）　info@o-ihcs.com

電子書籍「Otsuma eBook」

人間生活文化研究所では、電子書籍の出版を行っています。電子書籍ならパソコン、タブレット、スマートフォン等にダウンロードして、いつでもどこでも手軽に読むことができ、本棚のスペースをとらず、色あせることもありません。

また、印刷・製本・輸送費など、出版にかかる費用を大幅に削減することができます。欠品・絶版になるリスクもありません。出版された書籍にはISBNが付与され、ウェブサイト「Otsuma eBook」より世界中に発信されます。これまでに63冊の本が出版されています。

Otsuma eBook Recommended Titles ≫http://www.ihcs.otsuma.ac.jp/ebook/

新刊紹介

『大妻女子大学人間生活文化研究所の研究と歴史 1981-2018 ―新たな「研究の大妻」ブランドを目指して―』

大澤　清二、人間生活文化研究所　編著

〈発行〉2019年3月31日　〈形式〉PDF
〈ISBN〉978-4-907136-20-8　〈検索キーワード〉大妻　研究と歴史
https://www.ihcs.otsuma.ac.jp/ebook/book.php?id=63

大妻学院110周年を記念して本書を出版しました！
検索キーワード「大妻」「研究と歴史」と入力してください。電子書籍としてお読みいただけます。

■「本書の刊行にあたって」　人間生活文化研究所長　大澤　清二

かつては家政学関係者にとって家政学博士の取得は悲願であった。40年前のわが国には博士号授与機関が存在せず、やむを得ず他分野の学位を取得せざるを得なかった。こうした状況を克服するためにも、大妻はその2年前まで文部大臣を務め、当時は大妻女子大学学長となっていた内藤誉三郎氏を先頭にして家政学系の大学院博士課程を設置する構想を立てるに至った。そこでその研究教育活動の基盤となる組織として人間生活科学研究所が設立され、学則上も学部と同等に位置づけられた。この研究所の新設は家政学界待望の新機関であったが、それまでに獲得してきた「家政学の大妻」としてのブランド価値を学術的にも定着させることになった。家政学博士号と研究指導を求めて他大学の卒業生を含めて当時の指導的な研究者が続々と入学し、また学位を目指して現役の大学の研究者たちが研究所研究員として入所した。以来、日本における先駆的な家政学博士の審査・授与機関として学界の枢要を占めるに至り、研究拠点としての役割を果たした。学位取得者28名を輩出した。

盛時には所長のほかに専任教授4人、助手5人、4研究部門を擁し、研究と大学院教育に特化した本学のフラッグシップを担う組織であったが、やがて他大学にも博士課程が設けられるようになるなど徐々にその博士授与機関としての役割が変化し、時代の変化に対応してついに2008年「大妻女子大学人間生活文化研究所」と改組した。この改組は100周年中期計画に沿うものであった。

新研究所はそれまでの目的、性格を変えて研究活動のみならず、新たに学内の研究支援組織としても機能するべくスタートを切り、本学の研究活動全般に寄与している。大妻学院110周年を迎えるに当たり、これを記念して研究所の来し方と行く末を見通すべく、これまでに輩出した研究活動、研究者、研究業績を振り返って「新たな『研究の大妻』ブランドを目指して：大妻女子大学人間生活文化研究所の研究と歴史」を刊行した。

本書の内容

序　記念誌刊行にあたって

(1) 人間生活文化研究所のこれからを展望して …… 伊藤　正直
(2) 人間生活文化研究所の来し方と今 …… 大澤　清二

Ⅰ　沿革

概　要

Ⅱ　人間生活文化(科学)研究所の教育と研究

1．歴代所長、教員の方々からの寄稿文
(1) 人間生活文化研究所の思い出 …… 佐野　博敏
(2) 人間生活科学研究所と私 …… 髙石　昌弘
(3) 人間生活文化研究所の名称と改革について …… 下村　道子
(4) 四半世紀前に …… 池上　晴夫

2．歴代併任教員の方々からの寄稿文
(1) 継続は力となる …… 千羽　喜代子
(2) 仙波千代、柳澤澄子両先生と私にとっての大妻女子大学 …… 松山　容子
(3) 共同研究から学んだこと …… 松本　壽昭

3．人間生活科学(文化)研究所から飛翔した研究者たち

3.1．歴代助手の方々からの寄稿文
(1) 近藤四郎先生との想い出 …… 菊田　文夫
(2) 生理生態学研究部門の想い出 …… 田中　秀幸
(3) 人間生活科学研究所助手としての６年間 …… 柿山　哲治
(4) 大妻学院の創立110周年に寄せて …… 齋藤　実

3.2．博士課程に在学した方々からの寄稿文
(1) 平井信義先生との思い出 …… 井戸　ゆかり
(2) 離島調査の思い出 …… 岡野(浅川)　雅美
(3) 「生活の学」と研究所 …… 平山　素子
(4) 研究者としての基礎体力を培った日々 …… 宇都宮　由佳
(5) Sweet Memory of My Doctor's Course Journey …… Usha Acharya

3.3．研究員として在籍した方々からの寄稿文
(1) 保育現場と研究の狭間にあった日々 …… 長山　篤子
(2) 私と人間生活文化研究所 …… 鈴木　和弘
(3) 研究の起発となる研究所 …… 小磯　透
(4) 迷走の時、助走、伴走してもらった研究所 …… 西岡　光世
(5) 益本研究室の思い出 …… 滝山　桂子
(6) 私と人間生活文化研究所 …… 伊藤　みちる
(7) ネパールとの関わり …… 中西　純

3.4．研究員として博士号を取得した方々からの寄稿文
(1) 大妻で育まれた力を後輩のために …… 下坂　智恵
(2) 白に始まり白に終わる人世 …… 内田　洋子
(3) 博士論文(博人乙第１号)にまつわる思い出 …… 川上　梅
(4) 人間生活文化研究所に育てられた民族服研究者として …… 下田　敦子

3.5．特別研究員の方々からの寄稿文
(1) ことばの静と動 …… 河野　武
(2) 人間生活文化研究所での新しい研究について …… 中川　正宣
(3) 大きな夢を膨らませて …… 重吉　博右
(4) サラダ・ボウルからメルティング・ポットへ …… 伊藤　正直
(5) 「人間」についての研究の進む道 …… 柏木　由夫
(6) 「このとりとめなさが、好きっ」 …… 高山　宏
(7) Otsuma eBook考－「埋もれた宝物」の発掘を …… 前納　弘武
(8) 科研費と研究活動PDCA …… 大澤　清二
(9) 特別研究員として …… 井上　源喜
(10) 人間生活文化研究所の研究支援に感謝 …… 小川　浩

Ⅲ　研究成果の発信 ―研究活動を支援し研究者を育てる―

1．オンラインジャーナル「人間生活文化研究:International Journal of Human Culture Studies」の発行(2012―)
寄稿文
オンラインジャーナルの未来について …… 大澤　崇人

2．電子書籍「Otsuma eBook」の出版(2012―)

3．Newsletterの発行(2015―)

3.1．Newsletter「巻頭言」集(2015―)
(1) ニューズレター創刊のごあいさつ …… 大澤　清二
(2) 戦略的個人研究費の審査を終えて …… 牟田　博光
(3) 人間生活文化研究所設立35周年に寄せて …… 花村　邦昭

4．人間生活文化研究所が行う研究活動支援

4.1．学内競争的資金 共同研究プロジェクト

4.2．学内競争的資金 戦略的個人研究費

4.3．学内競争的資金 研究員研究助成

4.4．学内競争的資金 大学院生研究助成
－賛助金による若手研究者育成事業－

4.5．外部競争的資金「科研費」獲得支援事業
寄稿文
「科学研究費」獲得事業「科研塾」と個別相談から …… 久保　陽介

Ⅳ　人間生活文化(科学)研究所の科研費による研究・国際学術研究

1．科研費と研究所の研究活動
被服体型学分野／形質人類学分野／行動疫学研究分野／身体発育学分野／
東南アジアをフィールドとした衣生活学分野・生活分野／食生活分野／
運動生理学分野／その他の分野／
研究成果公開促進費(データベース)による研究課題／
研究成果公開促進費(学術図書)の刊行

2．国際学術研究

2.1．財団助成金と国際学術研究

2.2．共同研究者からの寄稿文
(1) 自由な研究を支援する場としての人間生活文化研究所 …… 牟田　博光
(2) SNSを通じて先住民の世界を覗く …… 綾部　真雄
(3) 東北タイの純農村から東京三番町へ …… 佐川　哲也
(4) 海外での子どもの健康実態調査と学校保健活動 …… 國土　将平
(5) 国際教育協力拠点事業での経験と研究への道標 …… 中野　貴博

3．国際協力事業

3.1. 文部科学省「国際教育協力拠点システム事業(学校保健)」の成果
3.2. 日本学術振興会「アジア・アフリカ学術基盤形成事業」の成果
3.3. 国際協力機構(JICA)客員研究員としてこれからの学校保健戦略についての提言
3.4. 私立大学図書館協会「寄贈資料搬送事業」の成果
人間生活文化研究所事務室

4．国際交流事業

4.1．内閣府青年国際交流事業の成果 …… 下田　敦子

5．産学共同研究 …… 大塚製靴株式会社／株式会社ブリヂストン／
株式会社オカムラ(旧株式会社岡村製作所)／
大妻女子大学北タイ学術調査1992

人間生活文化研究所事務室

Ⅴ　討論のまとめ―新たな「研究の大妻」ブランドを目指して―

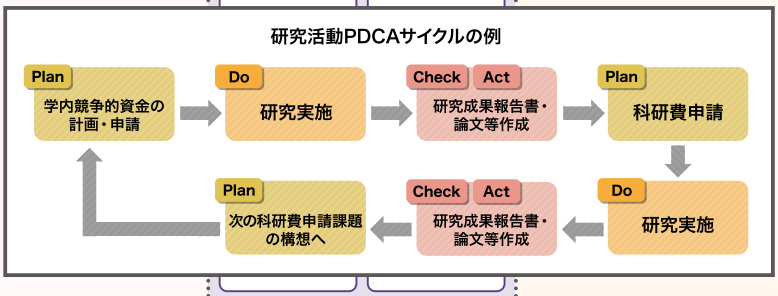
…… 大澤　清二、牟田　博光、中川　正宣、久保　陽介、下田　敦子

執筆者一覧

科研費PDCAスケジュール ～人間生活文化研究所が行う学内に向けた科研費獲得支援～

	戦略的個人研究費	科研費			
	2019年度採択者	申請者	人間生活文化研究所	(学内)研究支援室	日本学術振興会
2019年度					
7月 8月	研究計画の実施	次の科研費申請課題の構想へ			
9月				●9月下旬頃締切 教職員を対象に「2020年度科研費申請の有無についてのアンケート」を実施 ※申請希望者は必ず提出してください。	●9月1日(予定) 公募
10月		●9月24日 科研塾 ※申請直前講座	科研費申請の個別相談 ※随時、受け付けています。 ＊申込先 人間生活文化研究所事務室 03-5275-6047 info@o-ihcs.com	●10月中旬 研究支援室における科研費申請の締切 科研費応募書類チェック	
11月	●11月15日 中間報告書を研究支援室に提出	「2020年度科研費研究計画調書」の提出	「オンラインジャーナル『人間生活文化研究』」「電子書籍『Otsuma e-Book』の発行」 ※随時、受け付けています。		
12月 1月 2月 3月	●3月16日 収支等実施報告書を研究支援室に提出				
2020年度					
4月					●4月初旬(予定) 内定通知
5月 6月	研究成果をオンラインジャーナル「人間生活文化研究」誌に投稿 (投稿期限) 資料　6月12日 報告　6月26日 原著論文・短報 10月23日				

研究活動PDCAサイクルの例



【協賛企業】 人間生活文化研究所の事業は、多くの企業の皆様からご支援いただいています

- 前田建設工業株式会社
- 清水建設株式会社
- ダイダン株式会社
- 株式会社三井住友銀行
- 株式会社九電工
- 山崎製パン株式会社
- 株式会社オンワードホールディングス
- 三菱地所株式会社
- 株式会社オカムラ
- 富士ゼロックス株式会社
- 株式会社三越伊勢丹プロパティ・デザイン
- キユーピー株式会社
- 東京ケーターリング株式会社
- 株式会社内田洋行
- SMBC日興証券株式会社

(2019年7月現在)

大妻女子大学人間生活文化研究所
〒102-8357 東京都千代田区三番町12番地　大妻女子大学図書館棟6階
Tel: 03-5275-6047　Fax: 03-3222-1928　E-mail: info@o-ihcs.com
HP : http://www.ihcs.otsuma.ac.jp/

▶ ニューズレターの最新号およびバックナンバーはホームページよりご覧いただけます。

※ このニューズレターは、全国の大学・大学院、企業研究所、研究助成団体、官公庁などの関係機関に配布しています。